



TITLE:

安部公房における科学と文学(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

佐々木, 幸喜

CITATION:

佐々木, 幸喜. 安部公房における科学と文学. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19800>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	佐々木 幸喜
論文題目	安部公房における科学と文学		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位申請論文は、近代日本の作家、安部公房(一九二四～一九九三)の文学に、海外文学や神話、寓話、文化人類学、マルクス主義理論、動物行動学など、文学・科学に及ぶ広範な知見がどのように受容されたかを明らかにしたものである。</p> <p>安部公房の経歴、文学、研究動向それぞれの概要と、本学位申請論文の構成を記した序章に続き、第一章では、昭和二十六年に脱稿した初期未発表作品「保護色」の材源が解明され、安部の小説作法や思想の一端が示される。まず、「むすめ」とその父が周囲の模様や色彩に同化する点はアポリネールの「オノレ・シュブラクの滅形」に、次に、「むすめ」の手が白く変色することで少女から成人になると示唆される点はレヴィ＝ブリュル『未開社会の思惟』に、第三に、人間の皮膚が保護色を呈するように進化するという「先生」と「ぼく」の対話はパンネコック『社会主義と進化論』に、それぞれ依拠することが実証される。その上で、前二者の材源は安部が師事していた花田清輝の文章に触発されたものであること、保護色に関して医学的知見を利用することでシュルレアリスムの表現に合理性が与えられたこと、安部のマルクス主義支持によって雑誌掲載が見送られた可能性のあることなどが指摘される。</p> <p>第二章では、昭和二十七年発表の「プルートーのわな」の材源解明を通じて、当時の安部の政治的スタンスが考察される。まず、ねずみの「オルフォイス」(オルフェウス)が山ねこ「セレーネ」(セイレーン)の歌を破った話は、ギリシャ神話を大枠としつつ、花田清輝を介して接したカフカ「人魚の沈黙」に依拠すること、ねこの「プルートー」の首に鈴をつけに行ったまま帰らない妻「オイリディケ」(エウリヂケ)を「オルフォイス」が探しに行く話は、「誰が鈴をつけに行くか」というイソップ寓話や、「オルフォイス」が死んだ妻「オイリディケ」を探しに行くギリシャ神話に拠ることが明らかにされる。材源との相違点を分析することで、本作の寓意は、情報に翻弄されるねずみたち＝日本国民の衆愚性、優れた指導者でありながら、沈黙の力に耐えられず振り返ってプルートーに殺される「オルフォイス」＝アメリカの「走り使い」である「一般知識労働者」、プルートー＝「アメリカ帝国主義者」との解釈が示される。結論として、本作は日本政府を揶揄しつつ自己批判を行った、日本共産党の路線をなぞった作品であるとされる。</p> <p>第三章では、昭和三十三年原水爆禁止世界大会のフィナーレ合唱曲として上演された戯曲「最後の武器」の成立過程が追究され、科学者に対する安部の態度が示される。ヴァイゼンボルン原作『ゲッチェンゲン・カンタータ』は、当初、加藤衛訳「世界に警告する シュプレヒコール ―ゲッチェンゲン・カンタータ―」として原作に忠実に訳され、同世界大会での上演が予定されていた。しかし、加藤と親交のあった演出家千田是也が安部の戯曲の演出を手がけていたためか、脚本は安部に変更され、上演される。その際、具体的な語句の一致から、安部は加藤訳を直接の下敷きにした可能性が指摘される。安部は新たに、原水爆に関わったため死ぬことになる実在の人物や、峠三吉編『詩集 原子雲の下より』所収の子供の詩を取り入れることで、日本人に共感されやすいよう劇に現実味を持たせたことが解明される。一方、原作や加藤訳に見える、原水爆を作った科学者の名をすべて削除した点に、科学者の戦争責任を問わない安部の態度が指摘される。</p> <p>第四章・第五章では、安部の代表作の一つである『箱男』(昭和四十八年)の材源を多</p>			

面的に追究することで、安部の問題意識や人間観の一端が解明される。第四章ではまず、安部自身の複数の言及からティンベルヘン『動物のことば』への関心が指摘され、「縄張り」や「行動の転位」という点で本作に影響を与えたことが論証される。すなわち、動物はつがいとなる前に攻撃に似た奇妙な求愛の儀式を行うが、箱男「ぼく」と看護婦の関係にもこれが投影されていること、箱男の縄張り争いも本書に依拠していることから、「箱」＝「縄張り」であり、「箱」は巣箱の暗喩という解釈が提示される。縄張りを主張する動物として箱男を見ることで、女(雌)を求めたり、贗医者と争ったりする本作の構想も説明可能とされる。人間と動物との差異を前提としていたティンベルヘンに対し、安部は人間を動物の延長線上に見ることで、動物行動学での人間の位置づけを逆転させたと結論付ける。

続く第五章では、国家から認められない「乞食以下」「にせ医者」といった存在に触発された安部が『箱男』を執筆したことが確認される。これに関連して、「上野の浮浪者」や新宿の「行き倒れ」を報ずる作中の新聞記事が、「読売新聞」に依拠し、その数値を一部改変したものであることが解明される。その上で、人間の肉体的・生理的条件と対人距離との関係を、密接距離・個体距離・社会距離・公衆距離に区分するエドワード・ホール『かくれた次元』が、本作の登場人物間の距離と行動に応用されたことが論じられる。続いて、『かくれた次元』同様、安部が「演劇講義ノート」で言及したコンラート・ローレンツ『攻撃 悪の自然誌』、ハロルド・ピンター『かすかな痛み』が本作の材源であることが論証される。すなわち、『攻撃 悪の自然誌』で、縄張りを侵す相手を威嚇する動物が派手な外観である点は、本作で、縄張り争いをする箱男の派手な化粧ぶりに投影されている。また、主人公の居場所が他者に侵犯され、ついには入れ替わるという一種のアイデンティティ・クライシスは、前衛劇『かすかな痛み』に依拠したものと見られる。なお、論述の過程で、前章で指摘された『動物のことば』の影響が再確認され、本作が取り込んだのは、『かくれた次元』によって動物の縄張りを対人関係に援用した点、『動物のことば』によって攻撃本能を求愛活動へ転化させた点であることが指摘される。

終章では、各章の内容が要約され、安部が、科学と文学に渉る同時代の言説に敏感に反応し、それらを積極的に作品に摂取したことが確認される。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文の特長は、安部公房の初期作品から、代表作の一つである『箱男』に至る四作品について、文学のみならず社会科学・自然科学の領域にまで材源探求の手を広げ、安部の作意を詳細に解明した点にある。

昭和二十三年東京大学医学部を卒業した安部公房は、同年の『終りし道の標べに』で作家活動を開始し、昭和二十六年『壁——S・カルマ氏の犯罪——』で芥川賞を受賞、以後も前衛的、寓話的な手法で戦後文学をリードし続けてきた。その独特の作風の成立過程を解明することは、彼の文学を理解する上で必須であるにもかかわらず、従来は文学方面の影響関係に力点が置かれ、医学部出身である安部の自然科学の知見や、「演劇講義ノート」に記載されるような多岐に渉る読書遍歴については、十分跡づけられて来なかった。申請者は、安部の言及を丹念に拾い上げ、作品を取り巻く社会状況とも関わらせることで、その成立過程を明らかにしている。

まず第一章では、「保護色」という自然科学的な題材が、安部ならではの医学的知見により肉付けされたこと、レヴィ＝ブリュル『未開社会の思惟』やパンネコック『社会主義と進化論』といった社会科学の著作が摂取されたことを、文献に基づいて実証した点が評価される。さらに、アポリネール「オノレ・シュブラクの滅形」や『未開社会の思惟』の背後に、当時師事していた花田清輝の強い影響を看取した点は、次章と併せて本論文の成果といえよう。

「プルートのわな」を扱った第二章でも、花田訳のカフカ「人魚の沈黙」を材源と見抜いた点は慧眼であろう。ギリシャ神話やイソップ寓話の作り替えを跡づけたこの章では、アメリカによって奴隷状態におかれている日本国民と、アメリカに追従する「一般知識労働者」たる自らを本作によって批判的に寓話化した、との解釈が提示されているが、これは日本共産党の主張に沿った当時の安部の思想とも合致しており、説得的である。

続く第三章でも、先行作品の安部流の摂取、改変が跡づけられる。原作「ゲッチンゲン・カンタータ」に忠実な加藤衛訳と安部の翻案とを詳細に対照させることで、原爆の被害を受けた日本人を作中に新たに取入れたことが明らかとなった。日本人に共感されやすいような安部の工夫を具体的に指摘した点は評価できる。一方、原作で批判されていた、原水爆を作った科学者について、安部がその戦争責任を問わない態度を取ったことは、医学部卒業という安部の出自と照らし合わせたとき興味深い。今後、安部の「科学者」観のさらなる掘り下げが期待される。なお、語句の一致から加藤訳を下敷きにした可能性が指摘されるが、一致する例が必ずしも多くないため、申請者の言うように、これは可能性に留まる。

本学位申請論文の中核を為す第四章・第五章の『箱男』論では、「演劇講義ノート」など、安部自身の言及を丹念に跡づけることで、ティンベルヘン『動物のことは』やコンラート・ローレンツ『攻撃 悪の自然誌』、エドワード・ホール『かくれた次元』といった、動物行動学、文化人類学の知見が、ハロルド・ピントーの前衛劇『かすかな痛み』と結びついて、『箱男』の材源となっていることが解明された。加えて、作中に挿入された新聞記事を特定し、その数値の改変から作意を明らかにした点も評価される。特に、この新聞記事と関わって、密接距離・個体距離・社会距離・公衆距離といった対人距離によって対人関係が区別され、動物の縄張りとも有機的に結びつけられているとした点は、主人公が侵犯者と同化し、ついには入れ替わるというアイデンティティ・クライシスのモチーフと照応しており、従来の論を大きく前進させた卓論といえよう。

以上のように、安部公房の初期から『箱男』に至る四作品について、文学・社会科

学・自然科学に渉る広範な材源を探求し、作品読解に結びつけて着実な成果を挙げた点は大いに評価される。ただ、各章末には他作品への展望も見られるものの、代表作『砂の女』(昭和三十七年)などへの言及が無いことは、本論文をやや物足りないものになっている。また、第二章で、「オルフォイス」に仮託された「一般知識労働者」とはどのような存在だったのか、掘り下げが必要であろう。第五章で論じられた対人距離の数値が、『かくれた次元』と若干相違している点も、どのように意味づけるべきなのか、考察が望まれる。

このように、課題とすべき点はいくつか残されたものの、本論文が多くの新しい知見を提示し、安部公房研究に大きく寄与したことは疑いを容れない。日本近代文学と、社会科学・自然科学という異なった領域を、学際的に結び付ける申請者の研究は、本大学院人間・環境学研究科ならではのものと評されよう。

よって本論文は、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月15日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降